

# 中央公民館だより

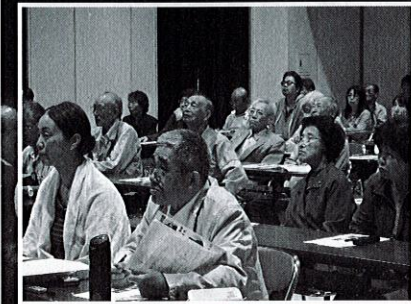
10月14日開催 にいがた連携公開講座

～像の種類～  
仏像鑑賞の基礎知識

にいがた連携公開講座  
仏像鑑賞の基礎知識  
～仏像の種類～

新潟産業大学 片岡 直樹  
(仏教美術史)

基礎知識～仏像の種類  
新潟産業大学 教授 片岡 直樹



## 公民館今昔 ～そして望むこと～

元広神村公民館長・魚沼市文化財保護審議会会長 山之内喜七



私は昭和四十年（一九六五）高度経済成長の円熟期からバブル経済只中の昭和五十六年（一九八一）まで公民館活動に参画させていただきました。当時は、農村部でも好景気の中「もの」中心の生活から「心」が失われつつありました。そんな現象は、地域の活力の中心であった青年団・青年会の崩壊や地域の絆の中心であった婦人会がいつの間にか経済活動の推進役を担った農協婦人部に塗り替えられて衰微するとうような社会情勢でした。こんな中での公民館活動はさまざまな事業を展開しながら、地域の絆をどう守りどう再構築してゆくかという課題と取り組んでいました。

旧広神村公民館は、発足以来「公民館専門委員会」という公民館行事の企画・立案・運営を一貫して行う活動の中核組織がありました。この専門委員会は、若者中心の構成でしたので「走りながら考える」という現場主義に徹し、常に事業の反省と評価を繰り返し、次へと生かす努力がなされていきました。こんな過去を振り返りながら現在の公民館活動を見ますと、社会教育・生涯学習・コミュニティなどさまざまな形の切り口がある中で、公民館はまだまだ「走りながら考え」なければならぬという難しい位置にあるように思います。

合理主義がもたらした「大きいことは良いことだ」という風潮の中で、忘れ去られてしまった「見える範囲」「聞こえる範囲」を活動単位とする公民館の原点を、もう一度確認し、見直す必要があるのではないのでしょうか。繰り返し起こる自然災害の体験の中から、結や絆がどれほど本物になっているのでしょうか。「結」や「絆」という言葉がイベントの主役になっている現状を憂いざるを得ません。

公民館活動の中心は地区公民館ですが、その体制の整備が喫緊の課題だと思えます。現状で多くを望むことは無理でしょうが公民館ボランティアなどの協力体制をより進めて、活動の中味を充実していただくことを切に望みます。

村民融和に多大な貢献

五十三年間 毎月千三百部各戸配布

入広瀬村公民館報が語る

活動の記録

昭和五十年当時、行政に馴染まない村民融和に関することや全村挙げての行事等はすべからず公民館が担っていたように感じています。例を挙げれば、次のような行事や活動等が公民館で実施されてきました。

第一点は、公民館報「新生」の発刊が特筆すべき大きな事業です。創刊は昭和二十六年二月号であり、以来、平成十六年の町村合併時まで継続発行されました。そのため当時の活動内容等が記録として残されており、貴重な資料として価値ある公民館報であると思います。新生はB5版十四頁、毎月十日が発行日でした。毎月千三百部発行しており、村内全世帯のほか、村外にも郵送しました。内容は、「行政広報」と「公民館報」の二つの機能を持ち読者の茶の間にどっしりと根をおろしていました。気軽に、そして親しまれる「新生」であるよう読者の皆さんから、ご意見、苦情・話題あるいは文芸作品なども投稿いただけるシステムを構築していた経緯にあります。なお、公民館報の作成等に当たっては、公民館部会の広報部員が記事の執筆や編集、校正等を行い、手作りの広報紙でありました。また、公民館報としての主要な記事は「おれの番だ！」これは村内在住者の自己紹介コーナーであり、次号の出番者は投稿者の指名で決められています。

た。「ふさんこったのんし」では入広瀬村出身者のうち、村外で活躍している方の投稿記事を掲載していました。その他「この人と十五分」では広報部員が自宅を訪ねてインタビューした記事を載せていました。

第二点は、公民館主催による公営結婚式の挙行であります。生活改善の一環として簡素化や手持ちなどの負担を軽減するため、公共施設を会場として公民館で結婚式及び披露宴を執り行っていました。（参考）当時のお手持ち二千五百円・引物は化粧箱入り砂糖のみ）

第三点、成人式・敬老会・文化祭・芸能祭・体育祭等々は、公民館部員はもとより、役場職員、分館長である大字区長や役員など村を挙げて実施しました。その他、学習講座の開催、グループ活動の援助、公民館図書を設置などに積極的な取組みを行いました。

今後の魚沼市の地区公民館体制や活動のあり方については、多くの問題が内在しており、特効薬がない以上、議論を尽くし活動が停滞しないよう配慮が必要です。

（入広瀬公民館長 佐藤利昭）



# うおぬま市民大学

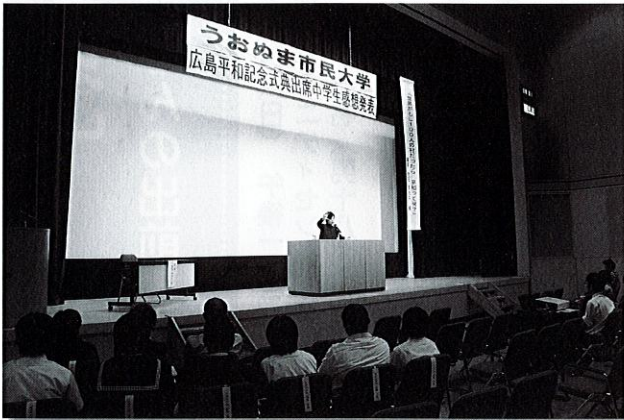
「世界がもし1000人の村だったら 平和って何」

広島平和記念式典派遣中学生感想発表

魚沼市教育委員会と中央公民館は、昨年9月29日、平和をテーマに「世界がもし1000人の村だったら 平和って何」と題してうおぬま市民大学を開催しました。

講師は「世界がもし1000人の村だったら」の著者で、作家・翻訳家である池田香代子さんをお願いしました。世界の人口を1000人に縮めると見えてくるもの。「52人が女性で48人が男性。30人が子どもで70人が大人。全ての富の59%を6人が所有し、17人はきれいで安全な水を飲めません。」優しく語りかける口調で、私たちが未来に向かって考えなければならぬ原発に依存した電力供給の在り方や平和、格差の問題についてお話がありました。

講演に先立ち、広島平和記念式典に参加した中学生が「平和大使」として自らが学んだ体験をもとに感想



の発表を行いました。魚

沼市は、平成21年5月1日に、非核三原則の遵守と核兵器の根絶や世界の恒久平和への願いを込めて、「非核平和都市宣言」を行いました。翌年からは平和に対する認識を深め、未来に向かい平和な社会の実現を目指して、毎年8月6日、広島市で行われる「平和記念式典」への派遣を継続しています。原爆ドームや平和記念資料館などの見学、被爆者から涙ながらに語られる当時の悲惨な現状を聞き、原爆や戦争がもたらした厳しい現状に肌で触れることができたのではないのでしょうか。「私たちの世代は、戦争の痛みを思い浮かべることしかできません。だからこそ、事実を進んで知り、受け止めていかなければなりません。そして、永遠の平和を守り続けていく責任があります。」参加者の感想の一文です。

世界で唯一の被爆国である日本。原爆の恐ろしさ、悲惨さを身近に感じ、当たり前にある平和がどれほど大切で、尊いものなのか。一人一人の力は小さくとも、地球から戦争が無くなることを願い、私たちが平和に対する学びを深めていくことが最も重要だと思っています。



# 「雪とくもまわる」

## 田邊幹さんの出前講座

二月二十四日(日) 午後一時三十分  
 於 広神コミュニティセンター講堂  
 参加者、三十七名(男十八名、女十九名)

県立歴史博物館、主任研究員、田邊 幹<sup>キナ</sup>氏を講師に迎え、同博物館の出前講座を広神公民館講座との共催で開催しました。当日は、あいにくの吹雪の中、「雪」について、そのとらえ方や認識が、時代の流れの中で変化してきた歴史について、スライドを交え、講演していただきました。



古来より、「雪」は、降って当たり前のもの、そこにあって当たり前のものがあった。人々は、氷室や雪室に保存し、縮や和紙の材料などの雪晒し、材木などの重い物の運搬にソリを利用してきた。子どもは雪洞で遊び、狩猟をするにも都合がよかった。そんな雪国のくらしが、「北越雪譜」等の文献に紹介されている。それは「雪」を克服し

ようとするものではなく、あるがままに受け入れ、みんなが助け合っている暮しであった。

**雪害** 明治以降、日本の近代化の中で、雪国(裏日本)現在に使われていない)と雪の降らない地域(表日本)と比較されることにより、地域間格差が生じてきた。その格差に気付き、その原因である「雪害」が、「克雪の父」松岡俊三により提唱され、「社会問題」として取り上げられた。又、「豪雪」という言葉も生まれてきた。

**克雪** 戦後のモータリゼーションと高度経済成長の中で、雪による経済的な損失を埋めるために、雪をどかし、雪を消し、道路を確保することが、政治的な救済措置として、除雪「克雪」へとつながっていった。長岡市の取り組みを紹介。

**利雪** 以前の保存やソリによる運搬などの利用から新しい雪の利活用を期待。

講演終了後、「利雪」について質問があり、雪の利活用への関心が高まっていることを感じました。今では当たり前のように行われている除雪も、先人たちの努力の賜であり、これからも私たちは雪とともに生きていかなければなりません。大変ありがとうございました。(松田光正)



## 地区公民館の活動報告

参加者の  
声  
声

### 小出北部公民館の講座から

#### 「チョココレート教室」に参加して

ケーキ屋さんでは、ショーケースの中にショートケーキとは違い、華やかさはないのですが、その姿は堂々としていて食べてみると外側の触感と内側の口当たりがとても魅力的なトリュフ。

2月2日の小出北部公民館での講習会は、その不思議に満ちたトリュフへの挑戦。最初に先生が、「一番難しいのはチョココレートをテンパリング（調温）することです。」との説明でした。調温することはチョコにツヤを出し、口当たりを良くするための大切な工程。溶かしたチョココレートを一度凝固点近く（26〜27度）まで冷まし、

もう一度温めることでチョココレートの中のカカオバターの結晶が安定すること。まさしく科学によ

りチョコの美味しさは最大限に引き出された瞬間でした。



出来たてのトリュフに思いを寄せながらの試食はフワッと、口いっぱい広がり、美味しいバレンタインチョコに出来上がりました。（高橋みき）

### 伊米ヶ崎公民館の講座から

#### 大人の工作教室「おひな様を作りましょう」

ひな祭りにあわせ、大人の工作教室として、紙粘土で「おひな様」を作りました。女性のみ参加でしたが、「超楽しかった！」「思ったより簡単でした」、「とても面白かった」との声をいただきました。

難しい方の雌びなから作り始めました。白い紙粘土に色粘土を混ぜてこね、自分の好きな色にしていきます。お団子のように丸めるのが難しかったです。「あんぼ」などを作ったことがある方は、とても上手に作っていました。

紙粘土を棒で伸ばし、袖をつけ、髪も作って顔を書いたら出来上がりです。雄びなも同様です。マシユマロみたいな触感の紙粘土で作ったかわいなおひな様で、皆さん大満足のようにでした

それぞれが違ったおひな様になり、その人その人の味が出ていました。

大人の工作教室もいいものですね。



# 「年輪」三十八号が発行されます!

堀之内公民館高齢者大学と堀之内地区老人クラブ連合会で編集・発行している文集「年輪」も、今年で38号となりました。

堀之内在住の65歳以上の方から寄稿していただき、ジャンルも幅広く、回想・短歌・俳句・どどいつ、さらには目でも楽しめる絵手紙など、読んでいても本当におもしろいです。

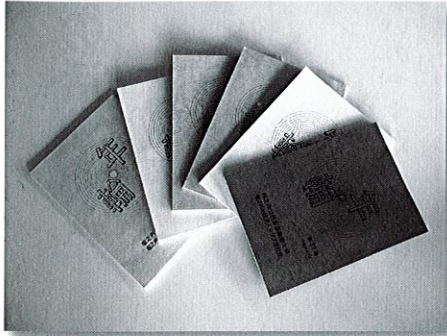
今年も98作品の寄稿がありました。

この紙面をお借りして感謝を申し上げます。ありがとうございます。

寄せられた原稿は、10人の編集委員で校正します。大変なご苦労と手間のかかる作業です。完成に至るまでに実に7回も集まり作業します。

この様に、裏方で支えている方があり、また何よりもご寄稿してくださる方がいて長い「年輪」の歴史が、今年も繋がることができました。

「年輪」の1号は昭和



53年発行と思われる。残念ながら2号（昭和54年2月25日発行）からしか、公民館では保存がなく、確認ができません。まさに幻の1号です。もしご存知の方、またお持ちの方がありましたら、ぜひ、堀之内公民館（☎794-6026）までご連絡ください。今年の発行までもう少し。どうぞお楽しみに!

## だんだん ど〜も

「美しい日本」から「強い日本」へ。  
5年ぶりに再登板の安倍内閣は、経済再生と教育再生で強い日本を取り戻すとしている。次世代へ回す大きなツケも心配だが、一方、「美しい」当時の安倍政権下でその見直しに着手した「ゆとり教育」は、ここに来てどうやら終焉を迎えようとしている。ゆとり教育が叫ばれた背景に、いじめ、登校拒否、自殺等の問題があった。それらの事象は今もなお顕在しているが、そこから生まれた全人的な「生きる力」の育成が必要だという概念は、いまでも当たっていると思う。心のゆとりは思いやりへ、心の豊かさにつながる。そこに活動の原点がある。この本質をどこか置き去りにしてこなかったのだろうか。意図するところ、踏み出した政策に見誤りは無かったのか。本質に目を背けない、言葉で飾らない、信頼に足る確かな政策の実現を期待したいものだ。（古田島）

## 表紙の

10月14日、県教育委員会と共催のいがた連携公開講座が開催され、市内外から多くの方が学びの場を共有しました

編集兼発行人 魚沼市中央公民館長 星野 修美